

## 「広島、長崎の原爆犠牲者慰霊祈念式典」

2014年08月10日

今年も、広島、長崎で原爆犠牲者慰霊平和祈念式典が行われた。式典が行われる度に原爆の恐ろしさを改めて思う。一発の火球によって、町は壊滅し、人々は超高熱で焼かれ、爆風に飛ばされ、瓦礫の下で殺されていった。戦闘員でない一般市民への無差別攻撃は戦争犯罪である。敗戦通告を早めにしていれば、死なずに済んだ人々である。聖書は、レギオン（ローマの重武装軍団）の霊につかれた豚の大群が湖になだれ込んで、自ら自滅していった狂気を記している。本土決戦を主張し、壊滅に導こうとした日本の軍隊は自滅に向かうレギオンであった。被爆者たちは、直後から今に至るまで、原爆症に苦しんできた。彼らは高齢になっているが、原爆の事実を伝えていきたいと懸命に証言活動を続けている。彼らの証言を、耳をそばだてて聞くことが、平和を求める私たちの義務である。

広島市の松井一實市長は「平和宣言」で、原爆がもたらした悲惨な実情を語り、核廃絶を訴えた。そして、戦後を平和に導いた日本国憲法の意味を力説した。ところが、現在最も議論されている集団的自衛権問題については、言及しなかった。なぜであろうか。

長崎市の田上富久市長は、集団的自衛権に触れ、下記のように語っている。「いまわが国では、集団的自衛権の議論を機に『平和国家』としての安全保障のあり方についてさまざまな意見が交わされています。……被爆者たちが自らの体験を語ることで伝え続けてきた、その平和の原点がいま揺らいでいるのではないか、という不安と懸念が、急ぐ議論の中で生まれています。日本政府にはこの不安と懸念の声に、真摯に向き合い、耳を傾けることを強く求めます。」抑制した言葉ではあるが、安倍政権に対しての危惧を率直に訴えている。

被爆者代表の城台美弥子さんの訴えが心に深く響いた。6歳の時、被爆したが、奇跡的に無傷であったという。彼女は「今、進められている集団自衛権の行使容認は、日本国憲法を踏みにじる暴挙です。…戦争は戦争を呼びます。…日本の未来を担う若者や子たちを脅かさないでください」と安倍政権を痛烈に批判した。彼女は更に、福島原発事故でおびえ、苦しんでいる中で、再稼働を行っていいのか。早急に廃炉を含め、検討すべきであると訴えていた。苦悩の中で、自分の言葉を紡ぎだす力強さと誠実さに心打たれた。

それに対し、安倍首相のスピーチは空疎で、心に響くものはなかった。目はうつろで、国民への愛や責任を感じ取ることは、およそできない。世界に向けて、核軍縮を訴え、国際的な評価を得ていると、自画自賛するが、信じる人は一人もないだろう。政治家は言葉に生きると言われるが、安倍首相は、その場限りの言葉を発しているのではないかと失望させられ続けている。オリンピック招致の演説で、汚染水について「under control（管理している）」と豪語した言葉には驚いた。被害を受けている人々は激怒しただろう。

安倍首相は憲法改定が悲願なのであろう。当初、憲法96条の国会議員の三分の二以上の賛成を、二分の一に垣根を低くしようとしたが、反対を受けて引込めた。変わって、解釈改憲を主張し、集団的自衛権を閣議決定した。解釈改憲とは、憲法の条文はそのまま残し、内実を変えてしまうことである。言葉はいつでもいい、実際はこうしますと、最もしてはならないことをしようとしている。言葉の真実と力を失わせることは、人を虚無に陥れ、文化を破壊し、国を破滅に導く。言葉の回復が急務であると、私は考えている。